

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

有標的指示詞の日中英対照研究

(A contrastive study of marked demonstratives in Japanese, Chinese, and English)

氏 名

孟 鷹

論 文 内 容 の 要 旨

指示詞の用法には、通言語的に広く見られる典型的なものから、周辺のものまで、様々なものが観察される。例えば、指示詞が固有名詞や人称代名詞を伴うものなどがある。しかし、指示詞については、数多くの研究が行われてきたが、指示詞の周地的 (有標的) な用法に関する、対照的な観点からの研究は管見の限り見当たらない。本研究では、通言語的・類型論的な観点から指示詞を考察した Diessel (1999) による分類を踏まえ、情意性 (affection)、非制限性 (non-restrictivity) という 2 つの概念を軸とし、指示詞の用法を次の表 1 のように分類した上、日中英指示詞の有標的用法に着目する対照研究を行い、3 言語における有標的指示詞の共通点と相違点を明らかにする。なお、本研究では、表 2 に示す名詞修飾型の指示詞に議論を絞る。

表 1. 本研究における指示詞の分類

指示詞の用法		無標的用法	有標的用法		
		制限的・ 非情意的	非制限的・ 非情意的	非制限的・ 情意的	制限的・ 情意的
外部指示的					
内部指示的	照応的				
	認識的				

表 2. 日中英 3 言語における名詞修飾型指示詞

	近称	(中称)	遠称
日本語	この	その	あの
英語	this/these		that/those
中国語	这 (zhè, zhèi (口語))		那 (nà, nài (口語))

本論は全 7 章から構成される。第 1 章では本研究の背景、目的について述べ、上記表 1 に示すように、指示詞の用法の再分類を行う。第 2 章では、日中英指示詞の無標的用法に関する先行研究を概観し、各言語における無標的な指示詞の機能および指示詞間の区別を整理する。第 3 章から第 5 章は日中英指示詞の有標的用法を考察する。

第 3 章では、日本語の指示詞「この」「その」「あの」の有標的用法を考察し、それぞれの機能を分析する。日本語の有標的指示詞は外部指示・照応・認識の 3 用法に分布し、主として非制限的・非情意的に用いられる。しかし、会話における照応的な「この」のみは、情意的な性質を有し、制限的・非制限的用法の両方が観察される。日本語の非制限的・非情意的指示詞（この・あの）は、談話参加者の共通知識により、修飾する名詞句に対して、指示対象が備えた特定の属性情報を喚起させ、付加的に与える機能を有する。情報追加用法と呼ぶことにする。

外部指示用法において、「この」「その」「あの」の有標的用法の使用は、非制限的・非情意的な場合に限られる。① 固有名詞や総称名詞句を修飾する場合、非制限的指示詞は共起する名詞句に対して、指示対象に関する現場情報（話し手との距離の遠近など）を付加することにより、指示対象に対する冗長的な言語的説明を回避する働きを有する。② 1 人称を伴う「この」は、情報追加用法と対比用法の機能を有する。前者は談話参加者の共通知識から話し手自身に関する何らかの属性情報を活性化させ、1 人称に追加する機能である（情報追加用法）。一方、後者は、1 人称が発話の焦点もしくは対比的焦点（または両方）に当たる、なおかつ、（他の代替要素よりも）話し手自身への言及が聞き手（あるいは読み手）にとって、予期しにくいと話し手が想定する場合には、話し手自身を他者と対比させる役割を果たす（対比用法）。

照応用法の場合、主として「この」「その」が有標的に用いられ、非制限的・非情意的、制限的・情意的、非制限的・情意的用法の 3 用法に分類される。非制限的・非情意的な場合、有標的指示詞は繰り返し用法、言い換え用法、情報追加用法という 3 つの機能を持つ。① 繰り返し用法において、先行文脈に現れた名詞句をそのまま繰り返す際に、非制限的指示詞が先行文脈との関連性をマークすることにより、聞き手の理解を容易にする機能を持つ。② 言い換え用法に関して、指示詞の共起する固有名詞が先行文脈に現れず、先行詞がそれ以外の言語形式により実現された場合、非制限的指示詞がその形式と固有名詞を結びつけることにより、初めて用いられる固有名詞に対して、聞き手の理解を容易にする機能を持つ。この用法は「この」にしか見られない。③ 非制限的な「あの」が修飾する名詞句に対して、談話参加者の共通知識から指示対象の属性情報を活性化させ、付加する機能を有する。つまり、③ は情報追加用法の 1 種として位置づけられる。非情意的用法に対し、情意的用法の場合、会話的な場面において、照応用法的な「この」は情意的に用いられ、発話に感嘆的な意味合いを付け加える機能を有する。この特質は制限的用法と非制限的用法のいずれにも観察される。

最後に、認識用法では、非制限的・非情意的に用いられる「あの」が照応用法における場合と同様の情報追加の機能を有する。認識用法は外部指示用法の場合と同様、非制限的・情意的および制限的・情意的な用法は存在しないと考えられる。

第 4 章では、中国語の指示詞「这」「那」の有標的用法を考察する。第 1 に、外部指示・照応・認識用法における「这」と「那」の有標的な使用が認められる。第 2 に、「这」「那」の有標的用法には、非制限的・非情意的、非制限的・情意的、制限的・情意的用法が観察され、日本語の場合と同様の分布

を示す。なかでも、外部指示用法と認識用法における有標的指示詞は、非制限的・非情意的な場合に限られ、照応用法にのみ、非制限的・非情意的、非制限的・情意的、制限的・情意的という3種類の用法が観察される。

まず、外部指示用法において、有標的な「这」と「那」は非制限的・非情意的に用いられ、日本語の「この」「その」「あの」と類似した機能を有する。つまり、共起する名詞句に対して、指示対象に関する現場情報を付加することにより、冗長的な言語的説明を回避する機能である。

次に、照応用法においては、非制限的・非情意的、非制限的・情意的、制限的・情意的な用法が観察される。第1に、非制限的・非情意的指示詞として、「这」「那」は日本語の有標的指示詞に観察される繰り返し用法に類似する機能を有する。すなわち、共起する名詞句と先行文脈との関連性をマークすることにより、聞き手の理解を容易にする機能である。第2に、すべての談話参加者が指示対象を同定でき、同時にすべての談話参加者がそのことを知っている場合に限り、非制限的な「这」は、話し手の感嘆や感情などを表す情意的な場面に使用される。非制限的・情意的用法に該当する。第3に、「这」と「那」がそれぞれ制限的・情意的に用いられることがある。「这」が制限的に使用される場合、日本語のコと同様に、発話に情意的な意味を追加できる。一方、遠称の「那」の制限的・情意的用法は、後方照応の場合に観察され、話し手の感嘆・感情を表す機能を有する。なお、中国語の指示詞は、日本語と英語とは異なり、以下(1)に示されるような同格型構造を持ち、この場合における指示詞はすべて照応的である。指示対象が単数の人物となる場合、この構造に用いられる指示詞は、制限的・情意的な性質を有する。

(1) [NP₁]_{同格1(主要部)} + [[这・那 ((+数詞)+分類辞)] + [NP₂]]_{同格2(修飾部)}

認識用法において、「那」が非制限的・非情意的に用いられる場合、談話参加者の共通知識に存在することをマークする機能を有する。なお、「这」は認識用法に用いられない。

第5章では、英語の指示詞 **this・that** の有標的用法に関する先行研究を概観した上で、有標的な **this・that** の機能を考察する。結論として、日本語と中国語の場合と同様に、英語の **this・that** およびその複数形 **these・those** の有標的用法は、外部指示・照応・認識の3用法に分布している。しかし、非制限的にしか用いられないという点において、日本語と中国語の指示詞の場合とは性質が異なる。より具体的には、指示詞が総称表現に用いられる場合と固有名詞を伴う場合に分かれる。前者の場合、**this・that** は外部指示用法・照応用法・認識用法に分布し、非制限的・情意的にしか使用されず、話し手の指示対象の種に対する感嘆・評価を表す働きを果たす。

一方、固有名詞を伴う有標的な **this・that** に関しては、第1に、外部指示用法において、**this・that** の有標的用法は非制限的・情意的な場合に限られる。この場合、**this・that** の両方が用いられ、話し手の指示対象への感嘆・評価を表す機能を有する。第2に、照応用法において、有標的指示詞は、非制限的・情意的な場合と非制限的・非情意的な場合に分かれる。前者の場合に、**this・that** の両方が用いられる。**this** は話し手の指示対象に対する何らかの感嘆・評価を表すのに対し、**that** は先行文脈で提示された指示対象の属性情報を固有名詞と結び付け、話し手の何らかの感情・感嘆を表すと同時に、非制限関係節と類似した機能を有する。後者の非制限的・非情意的な場合、**this** のみが容認され、聞き手

は指示対象を同定できるが、話し手は同定できないまたはしにくいと話し手が想定する場合に、指示対象の名前を繰り返す際に使用される。この場合、that の使用は容認されない。第 3 に、認識用法における有標的な this・that に関しては、非制限的・情意的な場合にのみ観察される。既存の研究において指摘されているように、this・that は談話参加者の共通知識に存在する対象を活性化させ、話し手の指示対象への感情・感嘆を表す機能を有する。

第 6 章では、日中英 3 言語における有標的指示詞の用法のうち、表 1 に示す 12 の用法に収められにくいものについて検討する。

最後の第 7 章では、第 3 章から第 5 章まで議論した日中英 3 言語の有標的指示詞の用法を比較することにより、その共通点と相違点を整理し、結論をまとめる。比較した結果、日中英 3 言語における有標的な指示詞は次の表 3 のように分布している。

表 3. 日中英 3 言語における有標的な指示詞

	非制限的・ 非情意的	制限的・ 情意的	非制限的・ 情意的
外部指示	日中		英
照応	日中英	日中	日中英
認識	日中		英

本研究における無標・有標的用法の分類の体系は、日中英の 3 言語だけではなく、他の言語における指示詞の用法にも適用可能である。しかし、すべての言語に有標的用法が認められるとは限らない。例えば、日中英指示詞に共通して観察される非制限的指示詞の使用は、韓国語では極めて限定的であるように思われる。そのため、今後の課題として、より多くの言語データを考慮に入れ、指示詞の様々な周辺的な用法を収集・分析することにより、「有標的指示詞の類型論」を確立することが期待される。